

フカウラヒドラの生活史（配偶子形成より幼ポリプまで）について

山田真弓, 久保田信（北大・理・動物）

The life history of *Fukaurahydra anthoformis* (Hydrozoa)

MAYUMI YAMADA, SHIN KUBOTA

フカウラヒドラ *Fukaurahydra anthoformis* は青森県深浦で発見され、1977年に新属新種として記載されたものであり、その形態などについてはすでに明らかにされている。その後、本種は北海道忍路にも生息することがわかり、忍路産のものについて、その生活史の概略を知ることができた。

本種は単立の大形ポリプで、忍路などでは波の荒い干潮線下の岩や、岩上に付着するフジツボ、イガイなどの殻の上に発見される。雌雄異体で、生殖体は雌・雄ともにヒドロ花上に生ずる。雌生殖体内に卵母細胞が生じ、それらは周囲の組織より栄養をとり入れ、次第に大形となる。成熟した卵は多量の卵黄を含み、やがて生殖体内で他の雄個体よりの精子により受精される。受精卵は卵割をはじめるが、卵割は不規則で、桑実胚のころ胚は生殖体内より生殖体上に裸出し、さらに发育を進め、やがて生殖体上から離れる。この胚は纖毛をもたないので遊泳をせず、すぐに付近の底に落ちる。この胚はほぼ球形であるが、数日後には底に粘着して扁平となり、やがてこの付着した胚は薄い包皮でおおわれるようになる。このような状態で夏から冬までを過ごす。実験室内では飼育条件によっては、この包皮が破れ、簡単なアクチヌラ様の幼体が生ずる。この幼体は4本の小形口縁触手と4、5本のより長い反口触手を持ち、数時間後はその反口端で近くの底に付着し、新しいポリプが生ずる。このようなポリプを飼育して成体にまでさせることにはまだ成功していないが、自然の海では、この若い小形ポリプと成体との中間的なものと考えられるようなものが発見されている。

岡山県吉井川で採れた淡水海綿 *Heterorotula* sp. について

益田芳樹, 高橋洋子, 松本邦夫（川崎医大・生物）

On the fresh-water sponge, *Heterorotula* sp. found in the Yoshii river in Okayama prefecture
YOSHIKI MASUDA, YOKO TAKAHASHI, KUNIO MATSUMOTO

著者らは1978年から岡山県内の池および三大河川の淡水海綿の生息分布を調べ6属10種の生息を確認し報告した（中四国支部大会、1979年、1980年）。このうち *Heterorotula* sp. は日本では未記載の異型盤属の一種なので特徴を記す。

本種は昨夏、岡山県和気町和気の吉井川で採集された。水深0.5～1 mの石の裏面に薄層のクリーム色の海綿体を形成していた。海綿体の基部には1～2層の芽球があり、芽球の形は球形またはだ円形で大きさは368～461 μ m（平均451 μ m）。芽球口孔はcup状で外部キチン層からやや突出する。骨片には骨格骨片と芽球骨片がみられ、遊離小骨片を欠く。骨格骨片はややわん曲し、両端に向かい次第に細まり両端は鋭く尖る。両端部を除き表面は微細な棘で被われる。長さは236～354 μ m（平均300 μ m）で太さは11～19 μ m（平均15 μ m）である。芽球骨片は両盤体で中部気胞層に放射状に並ぶ。軸はまっすぐかややわん曲し表面に多くの微棘がある。軸の長さは様々で26～58 μ mで太さは2.4～3.2 μ m（平均2.8 μ m）である。両盤は表面に多くの微棘を生じ周縁は細かな鋸歯がある。上盤は下盤より小さく、上盤の径は16～20 μ m（平均18 μ m）、下盤の径は19～24 μ m（平均21 μ m）である。

本種の芽球骨片は光学顕微鏡下ではカワムラカイメンのものと似ているが異なる大きな点は本種では両盤の大きさが異なることである。また本種は遊離小骨片をもたない。

以上の結果から本種は異型盤属 *Heterorotula* に属し、オーストラリアにのみ生息が確認されている *H. multidentata* の近縁種と考えられる。和名をマツモトカイメンとした。